



冬。道の両脇に高くそびえる
 白水の壁。目の前のすべてのもの
 を白色に変える吹雪…。
 私が福島県でも有数の豪雪地
 帯である只見町の朝日診療所に
 赴任してから、はや三年目に入
 ります。
 当初は意味が伝わらないこと
 も多かった只見弁も、今では、か
 わりはねがったかい？ よっぱ
 かせいでやったかい？(変わり
 はありませんか？ 頑張ってる
 いていましたか？)と診察中
 の会話でも自然に使いこなせる
 ようになりました。
 只見赴任の当日に誕生した長
 男も、日々やんちゃになってゆ
 き、子供の成長の早さに驚くと
 ともに月日の速さを感じてしま
 います。

いつか「会津の三泣き」に

まるで野戦病院

三年前、この町ではいろいろ

な事情から診療所の常勤医師が
 一人となり、ついには過労で倒
 れ、長期休診、無医地区となる

「医療危機」がありました。
 近隣の自治医大卒業生も支援
 を行う中、町内では医師確保に

向けた大規模な住民運動が起こ
 り、県も「へき地医療アクション
 プログラム」を策定。具体的
 なへき地の医師不足対策に乗り
 出すという、大きな流れを作り
 出しました。

その後、多くの人々の努力で、
 二〇〇四年一月に現所長医師が
 赴任。同年四月に私も赴任とな
 り、今年の一月からさらに医師
 一人が加わり、現在は医師三人
 体制となりました。

外来は一日百人前後、十九床
 のベッドはほぼ満床。夜間・休
 日診療、救急車対応、併設老人
 施設回診、訪問診療、各種保健
 事業への協力など、のんびりし
 た山村の診療所というより地域
 医療の最前線にある野戦病院と
 いったイメージです。忙しくは
 ありますが、地域の方々の診療
 所に対する期待は大きく、やり
 がいと責任感を持って診療をし
 ています。

町の高齢化率が40%近いこと

もあり、患者さんも高齢の方が
 多いですが、夏は野菜作り、冬
 は雪かきと精力的に働いている
 姿を見て驚くこともしばしばで
 す。

温厚な地域の人々

地域の方々は冬の厳しい寒さ
 とは対照的に温厚で、道を歩い
 ていると「ちよつと寄っていき
 やれ」と声を掛けられたり、
 「これ、食いやれ」と旬のも
 のをいただいたりします。

都市部では希薄になっている
 人と人とのつながりが、ここで
 はまだしっかりと息づいている
 のが感じられ、私も妻と子供も
 すっかり地域に溶け込んで暮ら
 しています。

会津には「会津の三泣き」と
 いう有名な話があります。会津
 に転勤で来た人は、自然の厳し
 さに一泣き、人々の優しさで人
 情に二泣き、そして会津を離れ
 る時、別れのつらさに三泣きす
 るというのです。

いつか只見を離れる日が来る
 ならば、私も三度目の涙を流す
 ことでしょう。

(次回予定は長崎県)

こんの 紺野 たけひこ 武彦 24期生、2001年卒



冬の国道。道路脇の雪壁の高さは3mを越える

只見町国民健康保険朝日診療所

【私の勤務地】只見町は県南西、奥会津地域の新
 潟県境に位置する人口約5300人の町。町内には広大
 なブナ林をはじめとする豊かな自然が広がり「水と
 緑と心のふるさと」がキャッチコピー。町内唯一の
 医療機関である朝日診療所はベッド19床の有床診療
 所。